

一切を包む御本仏の大慈悲

（御書全集 九一七頁五行目、同六行目）
編年体御書九五四頁五行目、同六行目

釈迦如来（にょらい）の御ためには提婆達多（だいばだつた）こそ第一の善知識なれ、今の世間を見るに人をよくなすものは
方人（かたうど）かたうどよりも強敵（ごうてき）が人をば・よくなしけるなり

私は、この御金言を拝するたびに、御本仏の宏遠無辺（こうえんむへん）なる大境界に、驚嘆の念を新たにいたします。善知識とは有徳の友人であり、人を仏道へと導き入れる人を意味しております。

さきに「相模守殿（さがみのこうどの）こそ善知識よ平左衛門こそ提婆達多よ」（御書全集九一六頁）とおおせのように、釈尊にとっての提婆達多と同様、大聖人は、みずからを迫害し、酷寒（こつかん）の佐渡へと流罪せしめた張本人である北条時宗や平左衛門尉を、御自身の善知識であるとおおせなのであります。

あつうならば、天に怨嗟たんさの声を放ち、悲涙をもって地をぬらし、あるいは悲嘆と諦めあきらの暗い日々を送っているのが当然でありましょう。しかし、大聖人は、その次下に「平左衛門尉・守殿こうどのましまさずんば争いかにか法華經の行者とはなるべきと悦ぶ」(御書全集九一七頁)とまでいわれているのであります。その御境界たるや、まさしく山をも抜き、海をも容ゆるる大慈悲と拝する以外にありません。私にはこの御文を拝するたびに、紅涙滴したたる思いがいたすのであります。私たちはこの一節をおし、難に遭遇そうごしたときの、仏法者たる者の姿勢の極底を学びとっていきたいと思います。

もちろん、大聖人の御一生にとうていおよぶものではありませんが、凡夫である私たちの人生においても、よいときもあれば悪いときもあるのが当然であります。むしろ、今日のような濁世、激動の時代にあつては、順境のときのほうが少ないかもしれません。また、広布遠征の途上にあつても、今後とも、さまざまな障魔が競い起こってくることは、御金言に照らして必定ひつじようであります。

そのさい、われら大聖人門下は、大きくいっさいをつつみこみながら苦難を避けずに、むしろ反省すべきことは潔いさぎよく反省をしながら、人間革命の絶好のチャンスととらえていくべきであると申し上げたい。

私は、佐渡において大聖人が「喜悅はかりなし」(御書全集一三六〇頁)と、宇宙大の大きさでわが生命の躍動を感じられた御心境が胸につきささってきます。

一般世間でも「艱難かんなん汝を玉にす」といわれております。まして信心の世界において、困難を乗り越

えずして、一流の人間、真金しんぎんの人に成長できるわけがありません。

「鉄は炎打てば剣となる賢聖は罵詈めりして試みるなるべし」(御書全集九五八号)ともおおせであります。安逸あんいのなかには本格派の人材は、けっして育たない。私はこのことを、とくに未来性豊かな青年部諸君に、強く要望しておきたい。

苦難もまた人間革命の因

学会の歴史にあっても、過去に、難をまえにして敗残の姿をさらしていった残念な人々を、何人か知っております。私は、それらの実例をみて、つねづね痛感していることですが、それらの人々は、外から襲ってくる難に敗れたというよりも、むしろ己心との戦いにおいて挫折さつせつしたといったほうが、真実に近いように思えてならないのであります。大聖人御在世当時においても同様であつたであります。その弱い自分に打ち勝つことが、信仰の第一義なのであります。

いまは亡きある有名な小説家が「波騒なみざわは世の常である。波にまかせて、泳ぎ上手に、雑魚ざこは躍る。けれど、誰か知ろう、百尺下の水の心を。水のふかさを」といった言葉があります。

まことに波騒は世の常であります。そこにたくみに生きる小さい心の人間もいます。しかし、人間のほんとうの偉大さ、尊さはなにか。みずからの信ずる目的のために波騒をつつみつつ、なおかつ悠然ぜんとと師子王の歩みをなす人こそ、もっとも尊い人であります。

われらの人生は、波浪に翻弄^{ほんろう}されてゆくような、はかないものではない。また、波間を巧妙に泳いでいくような、世故^{せこ}にたけた名聞の道であってはならない。しょせん、どう過ごそうとも、一生は一生であります。

ゆえに私たちは、このかけがえない一生を「浅きを去って深きに就くは丈夫の心なり」（御書全集五〇九^九）の御金言のままに、決定^{けつじよう}の日々でわが人生の歴史書を綴^{つづ}っていききたいものであります。

たしかに、釈尊にとっては提婆達多が、日蓮大聖人にとっては平左衛門尉が、第一の善知識でありました。しかし重要なことは、難に直面したとき、それを善知識とするか、悪知識とするかは、わが一念にあるということであります。御本仏の心を推察するのは恐れ多いことですが、平左衛門尉を善知識とおおせられたのは、いつに御本仏日蓮大聖人の比類なき御境界、大慈悲であられました。

総じて私どもにおいても、一念のいかんで悪知識も逆境も、ことごとく自身の成長の発条^{はね}としていくことができるのであります。また、罪障消滅につながっていくのであります。苦難があるたびに、真実の信仰の核は、いやましてその力を凝縮させながら、新しい時代を切り開いていくにちがいありません。

その意味からも「今の世間を見るに人をよくなすものは……」うんぬんのおおせも、まことに道理であると拝することができます。味方同士のなれあいの平穩にひたっていては、人間であれ組織であれ、墮落^{だらく}するばかりであります。苦難につぐ苦難の峻険^{しゅんけん}を踏破しぬいてこそ、嵐^{あらし}に揺るがぬ大樹のごとき境涯が開かれゆくのであります。

「難^{きた}来るを以て安楽と意^{こころ}得^う可^べきなり」(御書全集七五〇頁)とおおせのように、苦難こそ真実の平安であり、波乱万丈のなかに底光りを増していくものこそ、真金の人生であるといつてよい。

長途の旅を苦難と戦い、耐えぬいてきた人の顔には、つややかな輝きがあります。ひとまわりもふたまわりも境涯を開き、その目や表情は、不屈の光沢を放ち、私たちの内側に力強いなにかを生じさせてくれるものです。

どうか、皆さん方の一生もかくあれかしと祈りつつ、講義を終わらせていただきます。